学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　　殿

【授業担当者】

所属/職名： 農学部/准教授

氏　　名： 加治佐　剛

授業科目名	海外森林・林業事情
研修先	フィンランド自然資源研究所（フィンランド）、ロッテンブルク林業大学（ドイツ）
研修期間	令和元年9月10日　～　令和元年9月21日

［研修の目的・概要］

世界の農林業のうち、持続可能な木材生産は先進国で行われている。中でも環境に配慮した先導的な取組で有名なドイツおよびフィンランドの森林・林業・森林利用を見学することにより、森林・林業および森林観の多様性を学び、異文化を理解する素養および国際的視野を身につける。本研修の対象は、主に森林林業に関心のある農学部4年生であり、地域の森林管理の中心となる森林・林業技術者になることを目的とした森林科学コースに所属する学生である。ドイツは、地域の森林管理に責任をもつフォレスターが活動する先進地域であり、一方、フィンランドは林業がGDPの13%を占める林業先進国であり、林業のICT化が進んでいる国であり、それらの事例を知ることで、国際的な視野で地域の農林業に貢献できる人材の養成に資することが期待される。研修には、森林環境教育、技術者育成、フォレスターの役割と森林観、国際商品としての木材製品加工、地域活性化に向けた林産物生産、森林資源把握技術、林業のICT化、地域連携といった内容を含めている。

また、本研修は学部生対象の「国際森林論」と連動して実施し、大学院生向けには現地教員、住民と交流の際のリーダーシップを取らせ、リーダー育成の研修内容も含めた。

〔研修の成果〕＊事前学習も含む。地域のグローバル化や活性化に資する人材育成についての成果も記載してください。

事前学習として、ドイツロッテンブルク林業大学から留学生によるドイツの森林・林業およびロッテンブルク林業大学について、英語での説明を受け、英語による専門教育を受講する意識が付いた。フィンランドにおいては、ヘルシンキ（都市部）やサボンリンナ（地方）を訪問し、日本とは異なる林業、木材加工および木材利用の実態を見学した。

ドイツにおいては、林冠ウォークパーク、素足公園、エヒトゥレ製材工場、シュバルツバルト国立公園、チュービンゲン市有林を見学した。地域のグローバル化の観点では、エヒトゥレ製材工場の訪問が効果が高かった。エヒトゥレ製材工場は、モミの製材を行っている会社で卒塔婆やカマボコ板を加工しており、日本に製品を輸出している。日本ではモミの生産量が少なく、多国の製品を使わざるを得ず、海外の需要・マーケットを開拓することの重要性を認識できた。

ドイツ滞在中の学生の宿泊先はユースホステルを使用したため、本研修参加者以外のドイツの学生も滞在しており、英語でのコミュニケーションの機会を設けることができた。

地域の活性化に資する人材育成の観点では、林冠ウォークパークおよびシュバルツバルト国立公園の効果がより高かったと考えられた。林冠ウォークパークは木の高さと同じぐらいの高さにある吊り橋や40mほどの高さの螺旋形タワーがある民間の施設である。ドイツ人が普段から森林を身近に感じる生活スタイルといった影響が強いかもしれないが、林冠ウォークパークへの訪問者が多く、同様の施設がドイツ・オーストリアに9つ設置されており、ドイツやオーストリアで近年人気となっていた。施設自体はアスレティック、森林教育の要素が含まれていた。訪問した林冠ウォークパークがある町はかつて温泉保養地として栄えていたが、現在は訪問者が減少していたため、地方の再活性化の取り組みの一つということだった。

本研修で、日本や普段の生活圏とは異なる環境・生活スタイルを経験することで、また、言葉の不便を感じることで、普段の生活圏を含む地域のグローバル化や活性化への視野を広げられたと考えられる。

〔今後の課題〕

今年度の研修では、これまでのドイツ一国だけの研修から、フィンランドとドイツの二ヵ国を訪問する行程にしたことで、ヨーロッパの中でも二つの異なる森林・林業を見学することができた。しかしながら、今回のそれぞれの国での訪問場所では、日本との対比は可能であってもフィンランドードイツ間の対比を明確に理解できるコースにはできなかった点は工夫の余地があるように思う。

学生の研修での姿勢は、フィンランドでは比較的積極的に英語で質問する場面が見られたが、ドイツではそのような場面がかなり限られていた。事前学習を含めて、積極的に質疑ができる姿勢や雰囲気を作ることが必要だと感じられた。